

バレエ解剖学 5番バットマンタンデュ (パープログラム3) ドゥミは通るのか!? 通らないのか!?

あこがれだった恩師の深川秀夫先生から「有梨!!おまえはお嬢さんバレエなんだよ!!すまして踊ってんじゃねー!!」といつも叱られていました。なんか…先生をイライラさせる踊りだったのでしょね(笑)。おっしゃる事は良く分かりました。ハートが足りない(涙)。それに加えてバレエ解剖学に出逢っていなかった私はどこかで「自分は真にバレエをわかっていない」と悶々としていてちょっとあきらめと言うか、やさぐれというか…高校生時代はそんな感じでした。ドイツで長年大変なご活躍をされていらした先生のお稽古はそれはそれは芸術的で、先生の一言一句が宝石のように感じられました。そんな中で「タンデュはドゥミを通らないで!!」とやって見せて頂きました。ドゥミとは一般で言う背伸びをした時の足指の状態です。タンデュの時のドゥミは指の付け根を曲げかかとは上がっています。各方向にタンデュをする時に、出す時はつま先を伸ばしきる直前に、帰る時はまずドゥミを通してから各ポジションに収めます。今でこそバレエ解剖学が一般的になったのでこの「ドゥミ」については通らないという人も出て来ましたが、今から30年以上前に「ドゥミを通らない」はかなりの衝撃でした。女性はトゥシューズを履くのでフルポアント(つま先立ち)に立つ時、降りる時には必ず指の付け根を折って背伸びの状態を経由してから行います。ドゥミを通らなければ、立つときには土踏まずを使わないと上がれないし、降りる時には直接かかとにガンッと降りる事になり危険です。小さい時にはドゥミをしつこくいろいろに教わります。ところが、です。

秀夫先生のとつま先は百万ドル。秀夫先生だからこそできる技であって私の様な凡人には出来ないのよ…。タンデュのお手本を見せて頂くと、見事にドゥミは通らずに、富士山のように高いアーチのまま指をしっかり床で滑らせ、ドゥミを通らずあつという間に美しいバットマンタンデュの出来上がり。それでいて、ルルヴェ(背伸び立ち)をすると女性よりも甲の出た高い高いドゥミポアント。なんで!?!どうして!?! しかしその約15年後にその百万ドルの足と同じ足を見る事になるのです(ヤン・ヌッツ先生です)。当時秀夫先生に質問しても良かったのですが、恐れ多くてそのままに。ある時大御所先生の橋浦勇先生と電車が一緒になりました。「あなたは誰に教わっているの?」との会話から…「えーい、聞いてしまえ!!」と橋浦先生に悩みを打ち明けました。「秀夫先生に教えて頂いていますが、秀夫先生はドゥミは通るな!!とおっしゃるんです(涙)」すると「え〜?秀夫ちゃんが?そうなの?なんでかしら…」で終わってしまいました。まるで私が告げ口したみたいになってしまい「聞かなきゃよかったよ〜」と後悔しました。で、ドゥミ通るか通らないか問題は私の中でお蔵入りとなってしまいました。そして後にヤン先生に出逢ってその問題が解決する事となるのです。

ヤン先生解かれるに。そもそもバットマンタンデュでフルポアント(ストレッチ)になる過程と、トゥシューズでフルポアントになる過程はそれぞれ違うとの事でした。これを聞いて概念の違いにどうにもこうにも理解できずにとても苦しみました。え?タンデュとトゥシューズは同じことでしょ?? これはもう素直に信じてやってみるしかないとな板の上のコイでした。体重のかからないバットマンタンデュ。体重のかかるフルポアント。これだけの違いでした。タンデュでドゥミを通ることを意識しすぎると、かかを手前に引き込んでしまう作用が働きがちなので、アキレス腱に力を入れる事になり縮んでしまう。トゥシューズでフルポアントになろうとしたとき、重力に逆らい床を押すことが出来るのでドゥミは必要。との事で解決!!私の中ではめでたしめでたしでした。もちろん訓練でドゥミを通してのタンデュは可能です。しかし解剖学的にはタンデュでは指の付け根の曲げ伸ばしはそれほど重要ではなく、大事なのはアキレス腱に作用させずにつま先をどれだけ遠くにひっぱりだせるか です。アキレス腱を縮めない、固めない事の方が重要なのです。この世の中、絶対にこれが正しい!とは言いがたい事の方が多いですので、自分が何をチョイスするか? になるとヤン先生は言います。本当にそうだと思います。私の場合は解剖学を知らなかった時代は魂が喜んで踊っていない事を自分で感じていました。なんか…くたびれて終わってしまう…。いつ、どんな風になったらバレエを踊る喜びが真に味わえるのだろう? かなり悩みました。そんな時代があったからこそ、解剖学の有り難さが痛感できます。

このお教室ではバットマンタンデュの時「ドゥミを通して」を言いません。でもあえて「通らないで」も言いません。なぜなら現在も「ドゥミを通して」はどの先生もおっしゃいます。このお教室の生徒さんが外で困らない様、断固「ドゥミは通らないで」とは言わないようにしています。ドゥミ云々の前に、とにかく足指の感覚がずば抜けて敏感、かつ強靱であれば良いお話なのです。解剖学的に言えばドゥミを通ったって、通らなくたって、その先のつま先が「アララ…残念」ではこの議論は無駄に終わってしまいます。だから「指!」「ゆび!」「ユビ〜っ!!」と有梨先生は毎日叫ぶのです。